

# 漱石の俳句

——その発展と回帰——

倉田紘文

## 一 はじめに

正岡子規との出会いにより、夏目漱石が俳句を始めたのは明治二十二年であつた。文献によると、漱石の最初の俳句は

帰ろふと泣かずに笑へ時鳥 漱石

聞かふとて誰も待たぬに時鳥 同

の二句である。これは、その年の五月十三日に、旧松山藩主久松家が同藩子弟のために設けた常盤会寄宿舎で咯血して臥した子規への見舞いの手紙の中に書かれている。子規は四日前の五月九日に咯血し、そのことにより「子規」という号を自らつけた。又、その手紙より十四日後の五月二十七日の子規宛書簡に

「七草集には流石の某も実名を曝すは恐レビデケスと少しく通がりて当座の間に合せに漱石となんしたり顔に認め侍り」

とあり、この時はじめて漱石なる雅号を用いている。ここに言う『七草集』とは明治二十一年より筆を起し、二十二年五月に一卷となした子規の詩文集であり、その巻末に漢文で書いた批評に「漱石」の署名を付したのである。しかも漱石はその『七草集』に大いに刺激され、八月の房総旅行を素材としての、紀行詩文集『木屑録』を九月九日に脱稿し、郷里松山で療養中の子規に批評を乞うた。

こうしてここに「漱石」と「子規」の深い交わりが始まったのであるが、

その交友の接点の中心を担ったのが、俳句であつたことは言うまでもない。その交友は『木屑録』の諷評で子規が

「余、吾兄を知ること久し、而して吾兄と交れるは、則ち今年一月に生まれり。余の初め東都に来るや、友を求むること数年にして、未だ一人を得ず。吾兄を知るに及んで、乃ち窃に期する所あり。而して其の己を知るを辱うするに至つて、而して前日を憶へば、其の吾兄に得る所は、甚だ前に期せし所のものに過ぎたり。是に於てか、余は始めて一益友を得たり。其の喜知るべきなり」

と書いているように、実に深い心よりのものであつたのである。そこでこの小論では、子規との関わりの中で漱石の俳句がどう発展し、更には子規亡き後の漱石の俳句がどう変貌して行つたかを考察してみたいと思う。

## 二 漱石の俳句創作年譜

漱石はその生涯において、二千四百三十一句の俳句を作っている。その数は、明治二十二年から大正五年までの二十八年間という年月から割り出せば、決して驚くほどの量ではないのであるが、それを年度別に分けてみると、そこに年により随分と差があることに気づく。そして、その句数の差はそのまま漱石の俳句に対する姿勢の変化を表わしているとも思われる

のである。そこで試みに俳句を中心に、その他短詩形の作品数を年代別に示すと次の表の如くである。

漢詩	和歌	連句	新体詩	俳体詩	俳句	詩形年
以前	8 25	3			2	明治 22
	16				5	23
	1				30	24
					2	25
					0	26
	1				15	27
	5				462	28
	6				497	29
	1				282	30
	4				86	31
	4	2			330	32
	3				16	33
					19	34
					10	35
					22	36
			1	3	10	37
				5	7	38
					31	39
					132	40
			1		49	41
				3	20	42
	17				147	43
					22	44
	23				22	45
					5	大正 2
	9				122	3
	4				16	4
	78				48	5
	3				12	不明
208	8	2	3	15	2431	計

(尚、この作品数の年譜構成において、蒲池正紀氏と和田利男氏は共に、明治三十年……二六句、明治三十一年……一〇二句、としておられる。それは前掲注①の岩波版『漱石全集』の明治三十一年の項のはじめが、

正岡子規へ送りたる句稿 その二十八 一月六日、  
（傍点筆者）  
という前書で始まっているので、そのまま俳句も全てを明治三十一年のものとしたのであろう。しかし、漱石は明治三十年の十二月末から翌年の正月へかけて、熊本県小天村小天温泉に親友山川信次郎と二人で越年旅行をしており、その折りの句で、

行く年や猫うづくまる膝の上 漱石

以下十六句は、全て年末の作句である。即ち、その句数だけ明治三十一年度のものから引き去り、三十年度分に加えねばならない。又、蒲

池氏は明治四十四年……二二句（和田氏二三句）、大正四年……十七句（和田氏十六句）と異なりを見せている。）

この表でわかるように、明治二十八年（松山時代）から明治三十二年（熊本時代）の五年間における作句数は圧倒的に多く、その率は実に全体の六十八パーセントにも当たるのである。俳句に志す者としての漱石を語るとすれば、極言してこの五年間を指すことになるかも知れない。この時期の漱石について小坂晋氏は

「松山行きについては、明治三十九年十月二十三日狩野宛に『御存じの如く僕は卒業してから田舎へ行って仕舞った。是には色々理由がある。

理由はどうでもよいとして（中略）と述べており、あまり理由を考えたくない気持ち働いている。言いたくない理由の一つは矢張り失恋であったろう。（中略）松山落ち前後の漱石は万事、保治・楠緒子との漱石内部の心理劇を人々が追跡し、探偵している気がする、いわゆる網の目の如き被害妄想に苦しんだと思われる。この神経衰弱を克服するため彼は參禅し、効果がないと分かるや松山へ脱出したのであろう。<sup>⑤</sup>

と大塚楠緒子への失恋による都落ちを論じておられる。この恋愛問題には異説<sup>⑥</sup>があり、現時点でははっきりさせ得ないが、いずれにしても恋愛問題があったことには違いないであろう。例えば、江藤淳氏は

「彼はなによりも遠い所に行きたかったのである。『罪』からのがれるために、そして『生』に出逢うために。それはまた自己流謫でもあり、かつ自己回復への希求でもあった。遠い場所に行くことによって、それだけ深く自己の内部に下降し、そのなかから『生』の根源の力をさぐりあてたいという暗黙の衝動に、彼はとらえられていたものと思われる。」<sup>⑦</sup>

とその原因を嫂登世への愛の、彼自身の「罪」の意識と彼自身の「生」への希求だと言っておられる。又、千谷七郎氏は

「松山赴任後の明治二十八年五月十日附狩野亨宛書簡に見るとき、病状の一端がよく分かる。『東京にてあまり御利口連につゝ突かれる為め、生来の馬鹿が一層馬鹿に相成候様子に御座候然し馬鹿は馬鹿で推し通す（よ）り別の分別無之只当地にても裏面より故意に疝癪を起さする様な御利口連あらば一挺の短銃を懐ろにして帰京する決心に御座候、天道自ら悠々一死狂名を博するも亦一興に御座候』幸に狩野亨吉などの人は、漱石のこれらの異常の言動を胸中に畳んで、いたずらに詮議騒ぎ立てをするなどのことはなく、静かに漱石の脳漿の冷却するを待つ大人であったやうである。ともかく漱石の突然の松山赴任は、いろいろと巷説があるやうであるが、病気による東京脱出、遁走であると思われる。」<sup>⑧</sup>

と考察しておられる。こうして兎に角松山に行く気になった漱石の心には、そこが子規の郷里であり、又、明治二十五年の八月にすでにその地に一度子規を尋ねたことがあったということ等も左右しているものと思われる。しかし、西下した漱石は、佐々木雅彦氏の言われるように

「だが、背水の陣を敷いて松山に赴いた彼は、同時に『生活』の中に足を踏み入れていた。それまで、ただ『有用の人』たらんとし、『文学』に専心する学徒であれば足りた彼が、一時その緊張感を解くやいなや、『生活』の中に溺れていかざるをえなくなったことは、悲惨というほかはない。松山から熊本へとかけて、彼はなによりも一人の生活者であり、次第にその相貌を深めてゆくように思われる。（中略）熊本に移った年の六月、彼は結婚して一家を構えた。そして妻鏡子の妊娠、流産、再度の妊娠、重い悪阻、ヒステリーの発作、身投げ騒動、長女の出産……。ここに一人の俊秀が、次第に『往生』し『立ち腐れ』てゆく無惨な姿がある。」<sup>⑨</sup>

のような日々の生活なのであつたろう。漱石は子規へ宛てて「此頃愛媛県には少々愛想が盡き申候故どこかへ巢を替へんと存候今迄は随分義理と思ひ辛防致し候へども只今では口さへあれば直ぐ動く積りに御座候」（明治二十八年十一月七日）と書き、齊藤阿具へは「近々の内当地を去りたくと存候へども無暗に東京へ帰れば餓死するのみ夫故少々困却致居候」（明治二十九年二月七日）と書いている。そして、明治二十九年四月松山中学を辞任し、すでに先任していた親友菅虎雄の居る第五高等学校（熊本）に着任したのである。そしてそこでの生活は、明治三十三年五月十二日「英語研究ノ為メ滿二年間英国へ留学ヲ命ズ」という文部省第一回給費留学生としての辞命を受け、七月に熊本を去るまで続いたのである。

その間の漱石の心を支えたのが俳句創作であり、その志向は「子規へ送りたる句稿」<sup>⑩</sup>として、その一（明治二十八年九月二十三日）からその三十

五（明治三十二年十月十七日）までの約四年間、子規に添削を仰いだ句数は実に千四百五十句に及ぶのである。

英国留学後の漱石の作句数は激減している。俳句に替わって晩年には漢詩創作が目立つ。そしてその過渡期において、俳体詩及び新体詩等が試みられているのも注目し得る。

ここで漱石の俳句創作年譜を、その書簡や日記に合わせてまとめると次のようになる。

(1) 昨日故人五百題と云ふ者を見て急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり御笑ひ草に供したけれど端書故いづれ後便にて御斧正相願度候。(正岡

子規宛 明治二十四年七月二十四日 書簡)

(2) 小生近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高不を仰ぎ度候。(同右 明治二十八年五月二十八日 書簡)

(3) 小生の写真に拙なるは入門の日の浅きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候拙句又々御送致候故先使の如く御存分に御成敗可

被下候。(同右 明治二十八年十一月十四日 書簡)

(4) 帰松後何となく倉忙俳句を作るの閑を得ず偶得処亦皆拙悪なり然しながら習慣をかくと退歩の憂あり故に送る。(同右 明治二十九年一月十七日 書簡)

(5) 俳句頓ものにならず囊底と共に拂底に御座候頃日五言律一首を得候間御笑覧に供し候御大政願上候。(同右 明治三十年十二月十二日 書簡)

(6) 小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候。(高浜虚子宛 明治三十一年三月二十一日 書簡)

(7) 近頃は発句廢業駄句もなにも皆無に候。(村上半太郎宛 明治三十三年四月五日 書簡)

(8) 僕は一面に於て俳諧的文学に入りますると同時に一面に於て死ぬか生き

るか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい。(鈴木三重吉宛 明治三十九年十月二十六日 書簡)

(9) 芸術の議論や人生上の理窟が一時は厭になった。一竿風月、明窓淨几、さう云ふ趣味が募った。微雨当窓冷、一燈洩竹青 といふ句を得た。

風流の昔恋しき紙衣かな (明治四十三年九月十四日 「日記」)

漱石の俳句に対する姿勢の大まかな変遷は右のようになるが、内容的に四つのピークを見ることが出来る。その一は、(1)の明治二十四年であり、嫂登世の死去に対する悲しみと嘆きとその底にあった。その二は、(2)の明治二十八年である。松山に西下した漱石は、日清戦争に従軍記者として従軍していた子規が、療養のため帰郷し、漱石の下宿に同宿したのを機に、本格的に句作を始めた。そうすることにより深く暗い「鬱病期」<sup>①</sup>を脱した。

(3)と(7)の下降については次章において詳述する。又、その三は、(8)の明治三十九年頃であり、ほとんど五六年遠ざかっていた俳句に「草枕」を通して、それはすでに小説家として立つ覚悟からの、ある種の趣味的な立場で対した。そしてその四は、(9)の明治四十三年八月の、修善寺温泉での胃潰瘍のための大吐血以降である。

漱石の俳句はその転換期において、常に漱石の「生」そのものと深く関わっており、その度毎に俳風は変わって行った。以上のような漱石の俳句年譜の上に立って、次にその作品の発展とその変貌とを明らかにしてみた。

### 三 漱石の俳句

漱石は自身の文学について「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります。僕にはそれが一番強い説明です」(大正三年一月十三日 畔柳郡太

郎宛（書簡）と述べている。それは北垣隆一氏の言う如く「彼がまったく心の人であり、その文学は心の文学、すなわち心理的私小説」<sup>12</sup>なのである。漱石が真剣に俳句に取り組もうとした明治二十八年は、子規が「一個人には一個人の特色あり、一時代には一時代の特色あり。（中略）碧梧桐の特色とすべき所は極めて印象の明瞭なる句を作るにあり。（中略）印象の明瞭なる句を作らんと欲せば、高尚なる理想と茫漠たる大観とを避け、成るべく客観中の小景を取りて材料となさざるべからざる」と主張する客観写生中心の俳句界であった。

子規は漱石の句について「漱石は明治二十八年始めて俳句を作る。始めて作る時より既に意匠に於て句法に於て特色を見はせり。其意匠極めて斬新なる者、奇想天外より来りし者多し。（中略）漱石亦滑稽思想を有す。

（中略）又漱石の句法に特色あり。或は漢語を用ゐ、或は俗語を用ゐる或は奇なる言ひまはしを為す。（中略）然れども真面目なるものは何処迄も真面目なり」と評してはいるもののその傾向は子規の本心に叶うものでなかったことは言うまでもなく、漱石にとつては不幸としか言ひようのない時代であった。漱石も又、そのことは十分承知しており、「小生の写真に拙なるは（中略）天性の然らしむる所」（前章(3)）とある。それなのに漱石は「偶得処亦皆拙悪なり然しながら習慣をかくと退歩の憂あり故に送る」（前章(4)）と子規に添削を乞ひ、更に「俳句頓とものにならず囊底と共に拂底に御座候」（前章(5)）「小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候」（前章(6)）と言ひながらも、子規に欠かさず俳句を送りつづけている。しかもその数は、漱石の他の時期に比して異常とも思える程の多作なのである。（註<sup>10</sup>参照）

漱石がそうまでして作句をしたその理由は、一体何にあったのであろうか。

和田氏は「作品数の多いのは、それが簡便に作れるところ」に主

原因があったということにならう」と、『草枕』の画工の芸術論を作者漱石の意見として受け取っており、蒲池氏は「彼が二十二才の多感な日に正岡子規と邂逅していることの意味を見落すことは出来ない。更に彼は子規を松山に訪ねて、そこで高浜虚子と遭会をしている。しかもこの二人の郷土松山に赴任した<sup>16</sup>」ことをその主たる理由として上げるにとどめ、両氏共にそれ以上の考察はなされてない。十七字という俳句形式が他のジャンルよりも短かく、従つてその創作も簡便であることは否定出来ない。又、子規・虚子に邂逅したことが、漱石をして俳句に近づけたことも事実である。しかし、それはあくまでも契機であつて、それがそのままこの時期の膨大な作句数に結びつくとは思えない。

そこにはもつと深い何かの理由があるに違いない。私はその大なる理由として漱石の松山落ちを考える。松山中学へ赴任したそのこと自体ではなく、遠く松山にまで行かねばならなかったその漱石の心が重要なのである。明治二十四年「急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり」（前章(1)）と子規に便りを出した漱石のその時の句には、「悼亡 十三句」という詞書があり

朝 貌 や 咲 た 許 り の 命 哉 漱 石

君 逝 きて 浮 世 に 花 は な か り け り 同

のように、全て嫂登世を恋ひ、その死を心より悼んだものであつた。これらの句は、一朝の花である「朝貌」を二十五歳で早世した嫂のはかない命に当て、容姿秀麗のその美しさを「花」に譬えるという月並調の稚拙きままるものであつた。しかし漱石はそうして作句することにより、心の慰みを自ら得ようと俳諧を志向したのであつたらう。即ち、悲しみを抱いた漱石は、その悲しみと共に俳句の中に逃げ込んだのである。その逃避が、今また行動的には「松山行」となり、精神的には「作句没頭」となつたのである。

漱石の松山行きについては前章にて詳述したのであるが、小坂氏の言う「大塚楠緒子」との噂も実際にあったのであろうし、更にその最も深いところには、江藤氏の言う「嫂登世」を恋したこと、その罪の意識からのがれるためであったのであろう。そしてその時期は千谷氏の指摘する「病期」にも当たるのであった。「罪からのがれ、かつ自己回復への希求」のために、漱石は都を遠く離れて俳句に熱中したのである。(この不義の恋に対する罪の意識は、後に漱石の小説の一貫したテーマとなる)

当時の俳句が「高尚なる理想と茫漠たる大観とを避け、成るべく客観」的なものを要求していたことも、主観の強い漱石には本来なら不幸のはずなのだが、かえって今は都合が良かった。俳句創作の目的が「写生的態度」を通じて、暗い心の自分を明るい方へ向かわせるためでもあったからである。「写実の拙なるは」「天性の然らしむる所」と知りながら、あえて子規に教えを乞い、作句に没頭した理由がそこにあった。

その頃の作句の中で(正岡子規へ送りたる句稿 その二 十月)

吹き上げて塔より高き落葉かな 漱 石

五重の塔吹き上げられて落葉かな 何レヲ存セン 同

と写生句のあり方を研究的に問うている。このように忠実な「写生」への傾倒の中で

汽車去って稲の波うつ畑かな 漱 石

底見ゆる一枚岩や秋の水 同

等の純写生句を生むに到ったのである。しかし、やがて霧が晴れてゆくように、段々に鬱病から脱出しはじめるや、漱石の「天性」の主観の強さが頭をもたげ、そしていつよりか客観によって成される俳句には満足出来ないようになるのである。(前章(4)(5)(6))

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉

董程な小さき人に生れたし

漱 石

木瓜咲くや漱石拙を守るべく 同  
風のまがりくねって響きけり 同

のような句はすでに客観写生の枠外にあり、先述の子規評の如く、知識人としての漱石の意匠より成る諸諳精神の濃厚な句なのである。しかしその作句も「子規へ送りたる句稿」第三十五回 明治三十二年十月 を以て中止され、翌三十三年には英国留学ということも手伝って中断してしまうのである。もはや十七字の詩形には漱石の思想を盛ることが不可能となって来たのである。そしてその頃は子規も「歌よみに与ふる書」をもってすでに短歌革新の野望を燃やして、俳句よりもむしろ短歌に力を入れていたのであった。

子規は漱石の留学中の明治三十五年十一月十九日に死去した。漱石は英国にてその訃報を十二月に聞くが、「子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へども、かく筒袖姿にてビステキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず、昨夜ストーヴの傍にて左の駄句を得申候。得たると申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第」(明治三十五年十二月一日 高浜虚子宛書簡)のように、俳句への興味は覚めてしまっていた。

「天下に何が薬になると云ふて己を忘るるより鷹揚なる事なし。無我の境より歓喜なし。カノ芸術の作品の尚きは一瞬の間なりとも恍惚として己れを遺失して、自他の区別を忘れしむるが故なり。是トニツクなり。此トニツクなくして二十世紀に存在せんとすれば人は必ず探偵的となり泥棒的となる。恐るべし」(明治三十八・九年 『断片』)と漱石は書いている。この断片は明らかに『草枕』のモチーフとなったものである。周知の通り『草枕』は漱石の芸術宣言である。脱俗超凡の境地、それを美を生命とする「俳句的小説」と称して書いたのである。それ故に、その頃の漱石の俳句には、例えば

のような（この句は無村の「公達に狐ばけたり宵の春」に模したものである）言わば趣味的・即興的・有閑的な作句態度が濃く現われてくる。

その前後の漱石は、「小生は教師なれど教師として成功するよりはへボ文学者として世に立つ方が性に合ふかと存候につき是からは此方面にて一奮発仕る積に候」（明治三十八年五月九日 村上平太郎宛 書簡）と言うかと思えば、「僕は小説家程いやな家業はあるまいと思ふ」（明治三十八年十二月九日 野村伝四宛 書簡）とあり、小説家として立つことを願いつつも未だ迷いを持っていた。しかし、「吾輩は猫である」「坊ちゃん」の好評により一気に作家への意志を固めつつ、「草枕」においてははっきりと自身の小説家としての位置を得たのである。そしてその「俳句的小説」実際に俳句も十七句挿入）なる『草枕』自体が、「こんな世界に住んで真面目に苦しい思ひをして暮すのは馬鹿氣てゐる。真面目になり得るためには他人があまり滑稽的である」（明治三十九年十月二十日 皆川正晴宛 書簡）に分かるように、現実社会からの逃避だったのである。

こうして主体を小説に置き得た漱石は、翌年の明治四十年、全ての教職を辞して朝日新聞社社員となった。その年、入社第一作として『虞美人草』を書いた。その主観的なる作家生活は反動として、或いは心の憩の場として、漱石に再び俳句に近づけることになった。その作風は

底の石動いて見ゆる清水かな 漱石  
押し分くる芒の上や秋の空 同

のように、余裕のある平明な句柄を示しはじめている。

「風流の友に逢ひたし、人生だの芸術だの何のかのといふものには逢ひたくなし」（明治四十三年十月三十一日 「日記」）と、漱石はその年の八月二十四日の修善寺温泉での大吐血後の日記にこう書いている。北垣隆一

氏はこれを「消極的超脱」<sup>⑩</sup>と解しているが、その大患の後、九月八日にはじめて作った三句の中の一々に

秋の江に打ち込む杭の響かな 漱石

という句がある。この句について漱石は「思い出す事など」の中で、「是は生き返ってから約十日許りして不凶出来た句である。澄み渡る秋の空、広き江、遠くよりする杭の響、此三つの事相に相応したやうな情調が當時絶えずわが微かなる頭の中を徂来したことは未だに覚えてゐる」といい、寺田寅日子氏は「此句が本當の徂来によつて出来た事が明らかである。生死の境を通り越した後の名状の出来ない透명한静寂な心地が此「秋の江」であるかと思ふ」<sup>⑪</sup>と云う。（傍点 筆者）。

この「不凶」という一語、「徂来」なる一語、そして「此三つの事相に相応したやうな情調」が「頭の中を徂来した」というのは、言葉を変えれば、漱石の所謂「則天去私」ということになるのではなからうか。それはあたかも「そのつもりで書いたものではない」「硝子戸の中」<sup>⑫</sup>で無意識的に真の則天去私の芸術的境地に入ることが出来た」ように。人生も芸術も小説も、全て煩わしいものとして取り除かれた漱石の心にと浮かび上がった来たこの一句こそ、曾て宿命的な「罪」からのがれ、新しい「生」を得るために一心に子規に学んだ「高尚なる理想を避けた」句であり、自然に、全く自然のうちに「不凶」生まれ出た句なのである。

「私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にもせよ、道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものはありません」（大正二年十月五日 和辻哲郎宛 書簡）や「自分の今の考、無我になるべき覚悟を話す」（大正四年三月二十一日 「日記」）に現われた漱石の「則天去私」なる志向も、このように意識的に言葉となった時には「これまで「則天去私」は幼少の頃から漱石の心が求めつづけたかくれ家の象徴であった。現実逃避的な傾斜は、作家の生涯を通じての低音部を

なして<sup>②</sup>いたものが、はつきりと表面に露見したのであり、それは皮肉にも真の則天去私の芸術的境地から離れることになるのである。

この頃からの漱石の俳句には、画賛や詞書のある句が急増するが、それらの中にも、「大正五年九月二日 芥川龍之介宛手紙より」

秋立つや一卷の書の読み残し 漱石

というような、一つの山を越えた平明なる写生俳句が多く見られるのである。(勿論、漱石一流の諧謔的な句や故事趣味、漢詩調の句が全く姿を消したわけではない)。

ここにその漱石の俳句志向を通覧すると、「嫂の死の悲しみからの逃避」、「その嫂に対する不義な恋の、その罪の意識からの逃避」、更に「あまりにも煩わしい現実社会からの逃避」、そして最後には大患後の身心を大自然にまかせた「人生そのものの逃避」をその屈折点とすることが出来るのである。こうしてみると、漱石にとって俳句とはまさにその重くるしい「生」からの逃避の場であったのである。そして結果として、ついに、曾ての子規の写生論よりもむしろ深い境地において、漱石独自のあり様を以て再び「子規」の「写生俳句の世界」へ帰っていったのである。

注④ 「正岡子規へ送りたる句稿 その二十八 一月六日」の句稿中、

明らかに明治三十年の作と思われるもの 十六句

行く年や猫うづくまる膝の上 焚かんとす枯葉にまじる霰哉  
切口の白き芭蕉に氷りつく 家を出て師走の雨に合羽哉

何をつつき鴉あつまる冬の畠 降りやんで蜜柑まだらに雪の舟

此炭の唧つべき世をいぶるかな かんてらや師走の宿に寐つかれず

温泉の門に師走の熟柿かな 温泉の山や蜜柑の山の南側

海近し寐鴨をうちし筒の音 天草の後ろに寒き入日かな

日に映すはうけし薄枯ながら 旅にして申譯なく暮る、年

風の沖へとある、筑紫濁 うき除夜を壁に向へば影法師

注⑤ 小坂晋『ある相聞歌―漱石と大塚楠緒子―』「文学」第四十卷第七号(昭和四十七年七月号) 64 p

注⑥ 漱石の恋愛については、その相手を (イ)嫂の登世とする説||江藤

淳「夏目漱石」(新潮社 昭和四十九年刊) 中山和子「『濛虚集』

における漱石の原体験」(「文学」第四十卷第七号) (ロ)お妾さん

又は料理屋か待合の娘でパトロンを持っている女とする説||宮井一

郎「夏目漱石の恋」(「文学」第四十卷第七号)尚、この中で江

藤淳氏の説に、本稿は示唆されたところが大きい。

注⑦ 江藤淳「漱石とその時代―第一部」(新潮社 昭和四十五年刊) 261 p

注⑧ 千谷七郎「漱石の病跡」(勤草書房 昭和三十八年刊) 27 p

注⑨ 佐々木雅発「編年史・夏目漱石」『国文学』第十六卷十二号 昭和四十六年九月号 156 p

注① 昭和四十二年版 岩波『漱石全集』第十二卷 (以下特に示さない限り引用はすべて同書による)

注② 蒲池正紀『漱石の俳句』「草枕私論」(もぐら書房 昭和四十八

年刊) 56 p

注③ 和田利男「漱石の詩と俳句」(めくるまゝの社 昭和四十九年刊)

注⑩ 「子規に送りたる句稿」の詳細は次のごとくである。

年	月日	句稿番	句数	月句数	年句数
明治二十八年	9月23日	一	32	32	406
		二	46	88	
	三	42	184		
	四	50			
	五	18			
	六	47			
	11・3	七	69	102	
		八	41		
	12・14	九	61	460	
		十	40		
1・28	十一	20	169		
	十二	102			
1・29	十三	27			
	十四	40			
3・5	十五	40	40		
	十六	30			
3	十七	40	30		
	十八	40			
3・24	十九	16	31		
	二十	15			
7・8	二十一	28	28		
	二十二	62			
8	二十三	62	233		
	二十四	22			
9・25	二十五	40			
	二十六	51			
10	二十七	61			
	二十八	39			
10	二十九	20	90		
	三十	30			
1	三十一	20	261		
	三十二	20			
5	三十三	75			
	三十四	105			
9・28	三十五	52	29		
	三十六	29			
10・16	三十七	75	1450		
	三十八	105			
1	三十九	52			
	四十	29			
10・17	四十一	75	計		
	四十二	105			

注① 前注⑧の漱石年譜 226 p

注② 北垣隆一「改稿漱石の精神分析」(北沢書店 昭和四十三年刊) 4 p

注③ 正岡子規「明治二十九年の俳句界」(改造社版「子規全集」第四卷 406 p)

注④ 前注⑬の460 p

注⑤ 前注⑬の8 p

注⑥ 前注②の59 p

注⑦ 「余が『草枕』(談話)の中で漱石自らこう言っている。

注⑧ 寺田寅彦・松根豊次郎・小宮豊隆「漱石俳句研究」(岩波書店 大正十四年刊) 318 p

注⑨ 前注⑫の329 p

注⑩ 前注⑫の326 p

注⑪ 江藤淳「決定版夏目漱石」(新潮社 昭和四十九年刊) 15 p

注⑫ 明治四十三年以降三百八十二句中、九十句含まれている。